

「友さん」きつね（三田市三輪）

上野の国立中央病院の前を右におれると、三田ゴルフクラブのハウスの方へ行きます。今では、この道は立派に舗装（ほそう）されて、ゴルフ場通（がよ）の自動車のゆききがはげしいが、昔は両側が松林でさびしい山道でありました。このゴルフ場へ行く道すじに、ひょうたん池といって小さな池が二つならんでいます。このあたりは、昔は花山院（かさいのいん）にまいる西国巡礼（さいこくじゅんれい）か、小野、高平の方へゆききする人びとがわずかに通ったのであります。

雨模様（あめもよう）の夜などは、ここを通るとよくだまされたものであります。このひょうたん池のほとりに、「友さん」といった狐が住んでいました。きのうはどこの娘がだまされたとか、昨夜はかわいい巡礼がだまされたとか、町では「友さん」きつねのうわさに花がさいていました。

ある冬のさむい晩（ばん）でありました。三輪の地下（じげ）の源六（げんろく）は、母親につれられて来迎寺（らいこうじ）にお説教（せつきょう）をききに行きました。そのお説教のあとで村の人びとが、世間（せけん）ばなしをしているのをきいて、上野のひょうたん池のほとりに「友さん」という狐（きつね）がすんでいて、人をだますということでありました。この話をきいてからある晩、源六は、母親にわからないようにそっと家を出ました。木枯（こがらし）の寒い晩を源六は、ひとり狐退治（きつねたいじ）に出かけたのであります。

源六は、長い旅につかれはてた巡礼のようすをして、池の堤（つつみ）に腰（こし）をおろしていました。しばらくすると、風もないのに熊笹（くまざさ）がざわざわとなりました。

「友さんが来たぞ。」と源六は心をときめかしました。「友さん」きつねは声をかけて来ました。

「ああかわいそうに巡礼さん。私もこれから小野の方へかへるのだ。おくってあげよう。」

源六は、この時だとはばかり、狐の尻尾（しっぽ）をしっかりとつかまえてはなしませんでした。「友さん」は、とうとう狐の正体（しょうたい）をあらわして、これからは、人をだましたり人のものをとったりしないから、こらえてくれとあやまりました。源六に尻尾をとられた「友さん」きつねは、かなしそうにけんけん泣きながら、山のほうへとんでいきました。

村の人びとは、源六が一人で狐退治（たいじ）に行ったというので、大さわぎになり半鐘（はんしょう）をならしたり、太鼓（たいこ）をたたいたりしてあつまりました。紅い堤灯（ちようちん）は、山へむかって何十となくつきました。

源六は、狐の尻尾（しっぽ）をふりながら山からおりて来ました。源六の無事なすがたを見て、一番よろこんでくれたのは母親でありました。わんぱくの源六も、村でほめられるようになりました。それから、「友さん」きつねはどこへ行ったかわかりません。

それでも気味（きみ）のわるいところで、今でも夜おそくこのひょうたん池のそばを通ると、何だか変な気がして足がおもくなり、しばらくぼんやりと立ちどまっている人があるということでありました。

